螢の虫はしのぶなはてに火をとぼす。しやうがへ。うさやつらさにこの身をなして。こゝろつくしの通路なれど。秋の木の間をもれくる月に。なかめやさしき白菊の。ふけてきぬたの音聞けば。よそにも人をこひぬらん。われは其にはひきかへて。人目の關のしげゝれば。かくしのべともかいそなき。なれど定めぬうきよこそ。たのむかげぞとひとすぢに。よしや命を限りにて。通ひかよへは今は早。まことのいろに打とげて。君もろともに千代は經ぬべき。

みだれぐさ

春ことにまつ萠え出る若くさの。色もことなる深見草。すゞくれ草の吹きなびき。月もろともに雲見草。葉も散りくるやかはた草。たれに見よとてかた身草。のこせし人に手向草。かふる思ひもふかゑの。身は浮草の根をたえて。さそふ流れに岸根の草の。みだれ亂るもことわり草や。夕べ〳〵の其光り草。風あり草のしな

よわく。はまなのはしの遠なかめ。はや雲の邊のはつみ草。みやびやかなる面影を。忘れもやらでこひ渡る。こゝろも深きかけ川の。逢瀬もかなと祈りしに。いくちよみ草かいもなく。仇にくちぬる仇な草。今は中々おもひ草。しきなみくさの草の音づれ絶えて。とはぬ庵にわき草の。つゆの姿をさま〳〵と。おのが葉色にこそめ草。身は捨草とよし朽つるとも。我戀草にさく花の。ゑんに合はでも果つべきかはと。亂れ草なる心の糸を。むすびなぼすや戀ころも。

水調子

ちぎれ〳〵の雲見れば。夕べ寐ぬ身のとけしなや。雨もつ空の泣きたくば。こゝへ來て寐よ伴はん。元の雫となる人に。一粒そへてやる涙。のこらずとゝけみつせ川。此世からさへ流れの身。うき寐の鳥の顏ひやす。その醉醒の夢の世に。さいつさゝれつさゝれつさいつ。あいのおさへの替りめの。手元々々の闇くなる。つ

ねの闇路や親の闇。手向の水のさかさまに。ちゝの心は戀しむし。戀しゆかしの一聲を。我はまつ虫忘れずば。涙おこせよたるら虫。啼ねは惡う言ふことか。知るもしらぬもおしなべて。惜まぬものは嵐ふく。草木も色を失ふに。つまのりん氣はこがらしの。枝葉かくしてもいで、もいで契りて通ひ路とめて。かたき打たる顏つきを。憎くや鴉と謠ひしも。此夕暮はあはれにて。ほんに冥土のおうせなら。便り聞かまし暫しまて。翼休めよ秀松。しげみにからむしのぶ草。しめぢからなき見心に。二人が結ぶしら露を。めもとてひらふのべ紙は。假のものながら。本來空の明りには。實に燈すべき提灯も。燈籠もいらず搔立てず。ありし夜み世を其のまゝに。後世の燈しと明らけく。曇らぬ月の面影は。梛の枯葉の名ばかりに。鏡のうらに殘るらむ。梛は鏡にのこるらん。

四季の花

よしあし曳の山住居。四季のながめは面白や。梅が笑へば柳が招く。風のまにまに早蕨の。手を引さふて彌生山。つくらふ花はあだ櫻。桃は氣まゝに山吹の。見はてぬ内に春すぎて。はや卯の花にかすみ。そしてあやめ菖蒲や燕子花。ほつそりとほとゝぎす。アレタ立にぬれしのぶ。涼風にア、〳〵〳〵〳〵アレイ。厂がとゞけし玉章に。小萩がたもとかるかやに。返辭紫苑も朝顏の。後れ咲なる恨みわび。露にもぬれてしつぽりと。ふすまのとこの菊がさね。ヨイ〳〵〳〵〳〵ヤサア。宵はさゝゆく初時雨。松も杖つく老の坂。

四季の艶

春がすみむらさきだちしあけぼのゝ。梅に木づたふとりの音も。いつしかふけてこの花の。ころもやうすき舟人の。漕ぎゆくかたはすみだ河。ありやなしやのよいの月。をばなの風は君招く。淺きちぎりはたなばたの。さゝの一夜のかりまく

ら。おもひはつもる雪のあさ。すだれかゝぐるわかれには。もすそひかえてみわならぬ。その小だまきの糸によるこひ。

四季のながめ

梅のにほひに。柳もなびく春風に。桃の彌生の花見てもどる。ゆら〳〵と夕がすみ。春の野かげに芹よもぎ。つみかけたるおもしろさ。里の外の花田面の早苗いろ見えて。しげる若葉のかげとひゆけば。まだき初音の山ほとゝぎす。ひとこゑに、花のなごりもすわられて。家づとにかたらばや。草葉色ずき野菊のさきて。秋ふかみ野べの秋風つゆ身にしみて。ちらり〳〵と村はしぐれ。よしやぬるとも紅葉の。そめかけたるおもしろさ。野邊の通ひ路人目も草も。冬がれて落葉しぐるゝ木枯の風。峯の炭竈けぶりもさむし。ふる雪に野路も山路も白妙に。見わたしたるおもしろさ。

四季の雪

そも〳〵天のうるほひに。雨露霜雪の四つを見せ。おなじく雪月花の。三つの徳をわかつにも。雪こそことにすぐれたれ。まづ春は梅櫻。咲くよりちるまでも雪をわする〻色はなし。夏はさみだれの。ふるやの軒は暮れながら。庭はくもらぬ卯の花の。垣根や雪にまがふらん。夜寒わすれて待つ月の。山のは白きかげまでも。ふらぬ雪かとうたがはれ。冬野にのこる菊までも。また初雪とおもしろき。山路のうきやわするらん。

四季の段

山寺の。春の夕暮來て見れば。入相の鐘に花ぞ散りける。散ればこそいとど櫻はめでたけれ。よしや散らでもあだし世と。花によそへし口ずさみ。それを手本に

鶯か。謠へば琴ひく鳥の。聲に合せて皷草。チツチヽタンポヽ。手をつくづくしつぼすみれ。躑躅山吹いろ〳〵の。花もいつしか夏山の。若葉をわけて。初音めづらし時鳥。雲井の夜半に戀ひ慕ふ。身は卯の花のしらむまで。寐ずに待つのをなぶりに來るか。まきの板戸をほと〳〵。長き春日も徒らに。數へ過ごして花衣。なれし袂も香にそみて。野邊も山邊も花ゆゑに。いたらぬくまはなけれども。山の岩根をとめて落る。千筋百筋佐保媛の。手びきの糸の瀧なくば。手折りて行かん入相の。鐘より先に春霞。立ちなかくしそ風は吹くとも。

深夜の月

山の端に。一列見ゆる初雁の。聲もさびしくいたづらに。あだし言葉の人ごゝろ。あかぬ別れのかなしさは。夢うつゝにもその人の。知らぬおもひの涙川。うつす姿や鐘の音に。そら飛ぶ鳥のかげなれや。それならぬこひしき人は荒き風。うきに

身にとほるはげしさは。君にうらみはなきものを。小萩におつる白露の。くだけておつる袖たもと。おもふ心のたえ〳〵に。虫のこゑ〳〵さえわたる。なく音ふけゆく秋の夜の月。

白菊

やま人の、折る袖にほふ白菊の。まだうつろはぬ秋の色。かたみとだにも契りおく。月も撓まず小夜ふけて。訪ふべき宿はしら露の。里遠からぬ草むしろ。げにあぢきなき。いそがぬ旅の枕さへ。かへすほどなきうたゝねの。よその砧に夢さめて。あはれは夜半のものなるに。身にしむものは朝あらし。吹くにつけても小野の里。花すりごろもいまはかへらぬ春の色。霜夜の秋のしるしぞと。深山がくれの紅葉を。ふき來る風のたよりにぞ聞く。

時雨

猶松の葉の落そめて。夕影しろき待乳山。時雨々々になく鳴の。聲もこほるや干潟道。衣紋坂こえて鐘の聲。いでそのころは神無月。くるわ〳〵ずまゐは。涙でくらす野分つれなや吹きやちらしたる。あつたら小萩小薄花に醉ひ。また紅葉にはさめてたどりし土手おろし。春にかはりて袖さむや。提灯くらく行通ひ。みしりごしなるかすりうた。諸人のなずむはいろ千とせ山。雲はうす〳〵西をのそらに。入日猶てる虹のきよはし。ういぢよろう霜も霰も。ひつちこないて嵐につよき柏崎。かをりくらべん東と京と。いづくはあれど陸奥の。千賀のぜんせいそれにはかはり。こにしやまとが藻鹽たれ。おりたつ田子のうらめしや。けかよおじやれよ足音あらく。聲うはがれ、大門いまださゝずして。茶屋の半蔀みだれの格子。誰が羽織かづいてよぬくどく。女郎くどく。うけぎりどうぎりひとつがい。

せうしなるかならぬか戀の中の町。

しら玉

扨しら玉と申せしは。ゆふにやさしき伊達すがた。誰に見よとて咲梅の花がさ。ふか〳〵ときつれて。つれて行く時は。しる人ぞ知るしら瀧の。音羽もこゝかかなとり寺。むれて遊ぶ京わらべ。あふさきるさのしげりには。枝より落つる春風の。空にしられぬな雪なれや。友まち顔の山櫻。今此しやにじけんして。あふぐもかろかや清水の。絶えぬ眺めぞおもしろや。

しのぶうり

わしが在所は京の片ほとり。八瀬や小原の芹生のさと。世をしのぶ身は姫ごせの身でつまからげ。しのぶいらしやんせんかいな。ア、買はんせんかいな。世をし

のぶ、いつしかに君をまつちの山々こえて。かよふ庵崎駒形や。ちどりかもめの心があらば。白髭さんに願かけて。ちョッとお顔をみめぐりならば。それこそほんに首尾を待つそれ〳〵もさうかいな。衣紋坂。今宵くるわの逢ふせの首尾は。あしはの雨にしつぽりと。君はさんやの三日月さまに。しんじつしんから願かけて。ふたつまくらで樂しむならば。嬉しの森であろぞいな。深きゑにしの中じやいな。

新あしかり

名に高き、なにはの浦の夏げしき。風にもまれし芦の葉も。ざわ〳〵さつと音にきく。こゝには伊勢の濱荻の。よしやあしとは誰がつけし。われは戀にはくるはねど戀といふ字は迷ふゆゑ。さりとてはしら鷺の。とゞまれとまれと招くてかぜにゆき過て。又も催ほす濱風に。芦もさは立磯も浪。松風こそはざゞんざ。

しまづくし

ほの〳〵と先明け初むる初空に。かゝる霞の長閑やかに。三重七重八重九重までも。おなじころものしまもやうきて。潮くむたごのしま。春日につれてひとしほに。猶色ふかき松島や。おじまの浦に打寄する。浪にもまれて浮島の。岩根につもる淡路島。かよふ千鳥のこゑまでも。春めく水にこぐ舟の。中にしき寐のとまか島。旅のやとりのよもすがら。あるじと頼む花の露。袖にこぼれておきの島。はら〳〵鳥の聲そへて。さりこまなく朝ほらけ。うぢのかは島まきの島。小島が崎に吹きかほる。風しなやかに打なびき。つひには廻り合の島。あふ島ことの別れじに。いく袖ぬらす水島に。うつるもくもる春の夜の。おぼろ月よにしくものぞなき。

新狂亂

されば偏ねく津の國の。難波の梅の名にしおふ。大坂一つ花開けば。薫りは四方にかくれなき。その花の香にゆかりとて。今ぞ昔に返り咲。折を得がほの早咲と。陽氣うき立つ花のかほ。見せつ見らるゝ水かゞみ。いとど心もみだれ髪。肩にちら〳〵、袖や袂にちりかゝる。花か風雪か初時雨よの。何をたよりに降る雪の。池の氷の、とふとは風あふてひそかに開く。ま垣に殘る繻草に。つもれや〳〵思ひをつもる。あらおもしろの景色。見よやれ出て島山の。樹々もみぢのあやにしき。磯にのそめばたつ浪の。水の面に朝日影。かざしの袖に末廣や。松の葉ごしにながむれば。沖にたゞよふ水鳥の。かすみを分て出舟の。人目まがきか島がくれ。通ふ千鳥の幾夜か戀に。こがれ浮寐のとこの海。ちりやちり〳〵やちり〳〵と。ないてあかしか。恨みてすまの風情もかくは。水にあとなき景色かな。梅か枝に黄鳥ならで

飛びちがひ。とんでかゝりし飛梅の。そつこでかけたる梅だすき。とりつくる手をねぢ梅と。膝折梅桐壺ありャこリャ。加賀に梅田のゑんをひく。さて賑はしき梅重ね。おもしろや。さつと浦ふく浪の音に。とふ〳〵とくるひしも。くるひみだれてふしまろぶ。

諸葛孔明

柴の編戸の隙見えて。雪に跡ある臥龍岡。三顧の恩に三分の。鼎の足と天の下。はかり定めてさし出てし。心の月の影うつす。水と魚との君臣が。契り短かき夢の後。托孤の命の重ければ。身を鴻毛と輕んじて。出師の表に注ぎつる。唐紅の血の涙。目に餘りある大軍を。千たび八千たび破りても。衆寡敵せず粮足らず。瘁け傷く兵士が。かぶとの星の影落ちて。秋風寒き五丈原。

一聲

一聲は月がないたか時鳥。いつしかしらむ短夜の。まだ寢もやらぬ手枕に。男ごゝろはむごらしい。女心はさうじゃない。片時あはねばくよ〳〵と。愚痴なやうだか泣てばつかりゐるわいな。

ひな鶴

ひなつるは其枝々に巣をくひて。きみもゆたかに。われもゆたかに。すめるたみとて久かたの。ひかりのどけき春の日を。しづこゝろなく花やちるらん。げにちればこそ〳〵。いとゞさくらはめでたけれ。ちらすばまたのはるがすみ。たれかしのばんうぐひすの。たによりいでゝ聲ざへも。野のすゑ山のおくまでも。おなじめぐみにあひたけの。よはひ久しきまつはなを。きみにひかれでよろづよや經,

ん。

ひなぶり

戀の重荷の島の内。送り迎ひにかく駕の。たれであらうとして來いな。棒ばなにくゝりつけたる提灯の。ひからの約束して來たな。高いも卑いも色のみちな。隔てるたてん息杖も。つきぬ樂しみゑッさッさ。さッさおせ〳〵夢の通路なエ。

火おけ

浮名たつ事のはづかし夜毎に。はだと〳〵をあたゝめつ。思ひのまゝになでさすられて。寢覺の時のすいつけ煙草。あいそに一寸くぜつごと。煙管でたゝく疳癪に。思ひよるべの文の數。肌身はなさぬ年月を。うつればかはる飛鳥川。花にねとられ夏はまた。ほとゝぎすめに見かへられ。つい秋風とそよにふく。雪にすい

たげな二人して。逢はしてくれる嬉しさは。昔語りの春日影。

ひがし山

ふとん着て、寐たる姿は古めかし、おさて春めく知恩院。その櫻門の夕暮に。すいたお方にあひもせで。すかぬ客衆によびこまれ。山寺の入相つぐる鐘の聲。諸行無常はまいのかは。わしはむしようにのぼりつめ。花のいたいきどれ行て見やう。花はうつらふものなれど。葉こそ惜しけれ。葉こそ緑の芽たち色ふかみ草。

人丸

有かたや持統文武の聖朝に仕へ。齢も長き和歌の德。なかめあかしの朝霧に。千船百船眞帆片帆。島かくれゆく浦千鳥。むら〳〵千鳥亂れて遊ぶ。ちりや〳〵。友呼ひかはす磯千鳥。ほの〳〵の歌かきの本。人丸の名は有明の。月も雲

井にうつるさゞ浪。

髭やつこ

おらと女郎衆は、なぜにふりやすふりやんす。雨か雪かとぬれてしッぽり。しめて寐た夜はひげ〳〵ひげ〳〵。髭をば引かれた。やんれひげをは引かれた。きつく引かれて目が覺めた。鞠子の宿でなぜにころばすころばんす。三五夜中のまんまる顏で。しやれた姿の赤前垂に。袖々々袖をばひかれた。やんれ袖をばひかれた。きつく引かれてサころび寐た。淺い戀なら枕はせまい。まくらはせじとよう言ふた。そりゃこそお立じや。小氣味よい程ぎュんぎュとひッかけろ。さても身につくホイすいつく。章魚がおあしか錢がおあしか。ま一杯ひッかけろ。達者な宿入り。せがれ引つれ、かゝが迎ひに。戻らしゃッたかの早かッたの。はてな宿入り、お手が揃ふたへ。

もりつくし

ゆく水に錦つれだつ山川の。風にはら〳〵玉こぼす。朝な夕なの露のもり。あま り〳〵て我袖に。たゝぬしづくのもりふかく。しのぶもりのかひもなく。物や思ふと人のとふまで。仇に袂のいろもので。人やとかめぬ耻しの。もりの下へにおく露も。みなくれなゐのたまとのみ。見えて木ずえにいとしるく。ともしつれたる紅葉の。あたらよひをはふきさます。こがらしのもり。あささびていとゝさびしきそのはらや。ふせやおふるはゝそのもり。ゆくかりがねの羽風より。こぼすは露か雨のもり。晴れて思ひも夕暮も。いとおもしろくすむ空に。入日や出る月かげの。光りめてたき秋の夜や。

せきつくし

かゝとばかりにあひ馴れてそめて。今はなか〳〵黄鳥のせき。つゝむつらさのいはでの關よ。戀にくちなんなこその關よ。いく夜ねざめの須磨の關。よその見るめもせきの名かへて。いつ大阪の關ともならば。とけて心の下紐のせき。あくるあしたのわかれのとこよ。せめてかたみのころも手の。せきかはすたもとになごりもつきぬ。いかで涙をおさへの關よ。つもる思ひのやるかたなさよ。かきすさみたる文字のせき。いよしものせき。

千手

燭は暗し數行虞氏の涙。夜は深し四面楚歌の聲。御いたはしやいとほしや。きのふは翠帳紅閨のうちに。錦をかつぎ綾をしき。おほとのごもりしたまひけむ。比翼連理の夢さめて。けふは東にとらはれの。御身とならせたまひては。孤雁の妻をしたひ。孤猿の友を呼ぶ聲ならで。寐ざめことゝふ物やなからむ。一樹の蔭一

河の流も。他生の縁と聞くものを。鴛鴦の衾はかさねずとも。同じむしろ一つ床(ねど)に。あけくれなづさひまゐらせし。君がころものうつり香の。いつの世にかは忘られん。流水去つてかへらずば。落花いかでかとどまるべき。かりのやどりに結びつる。露のゆかりを忘れずば。清き汀にさくといふ。蓮のうてなのうへにだに。

捨をぶね

年ふとも、變らじ物は橘の。小島が崎と契ひてし。此身を今は捨小舟。せめて連立つかり金の。文と思へはなつかしや。何をにくうてさよ秋風に。萩も薄もあちらむく。のふあちらむく。萩も薄もあちらむく。かこち顔なる我涙かな。なげけよとにはなき物を。のふなげけよとにはなき物を。ねもせで月見をゝひとりたゞ。身は浮雲の晴もなし。

住吉

一千年のいろは雪のうちに。ふかきねかひもけふこそは。はる〳〵きぬる旅ころも。ひもうらゝかによものそら。かすみにけりなきのふまで。浪間に見えし淡路島。あをきがはらもおもひやる。げに廣前のすが〳〵し。かたそぎのゆきあひのしもの幾かへり。契りやむすぶ住吉の。まつのおもはんことのはを。わが身にはづる敷島の。みちをまもりの神なれば。四季のなかめのそのうへに。こひはことさら難題がちに。よめたやうでもよみおほされず。てにはちがひに心をつくし。たかいも、ひくいも歩みをはこぶ。中おしてるやなにはめの。よしあしとなくかりそめに。うたふひと節みやびなる。わすれがひとのなはそらごとよ。あふてわかれてその後は。又の花見をたのしみに。ひかず數へて思出す。わすれぐさとの名はいつはりよ。しげりてかれてそれからは。後の月見をたのしみに。よはをつみつゝ

おもひだす。春や秋、そのかみ、世にひかるきみ。ごくはんはたしのよそほひの。いまにたえせずおくはなほ。ふかみとりなるその中に。花やもみぢをひとゝきに。こきちらしたるにきはひは。筆も言葉もおよびなき。をりしも月のいてしほに。つれてふきくる松風の。つれてふきくるまつかぜの。かよふはことのねがひもみつや。よつのやしろの御めぐみ。なほいく千代のかぎりなき。みちのさかえと祝しけり〳〵。

すりばち

海山こえて此よにすみながら。比翼連理と契りしなかも。烟りをたつる賤の女が。心々にあはぬ日も。逢ふ日も夜は一人寢の。暮ををしみてまつやまかづら。晝のみくらす里もがな。

すがゝきのうた

三吉野のかほるは花の咲きみちしばをふ。しうあつまちかいそけと。もろこしみちとせいくのゝみち〳〵。みゆきまゝならす。名所は住の江、すま明石。夕きりふもとちのせちさと咲き來る。風に亂るゝ初花こむらさき。若まつにむら雨こと うらや。雲をさんごのきてうはこゝのへのたち花。あふよのかよひぢみうらをう。かくながむれと。ゑにしのきく川はちよのうてなにたよねない。

柱之巻　組有多

花宴の曲

◎一段　幾春もこゝになほ。みはしの櫻色まさり。雲居の花は久かたの。空ふく風もおよばし。

◎二段　雲のうへ人かざしして。色をあらそふむらさきの。袖のかをりはうちはゆる。大内山の夕つく日。

◎三段　夕ぐれの薄がすみ。たがならすいと竹。おもひある身にはたゞ。よそのしらべもなつかし。

◎四段　梅つぼのあたりより。小籠のひまにもれくる。風のかをりはよひのまの。闇はいとゞあやなし。

◎五段　弘徽殿のほそとのに。たゝずむはたれだれ。朧月夜の内侍のかみ。光源氏のたいしやう。

◎六段　いとゝなほふかき夜の。あはれをしるも入る月の。おぼろげならぬちきりこそ。今身におもひしらるれ。

羽衣の曲

◎一段　君のめぐみは久かたの。天の羽衣まれにきて。なでしこはほにそのまゝに。動かぬ御代のためしかな。

◎二段　星をとなふるすべらぎの。雲の上までのどかなる。あしたのけしきあらたまの。春日くもらぬ天が下。

◎三段　ならの小川の夕かぜに。しらゆふかくる波の音。神のこゝろをすゞしめの。みそぎぞ夏のしるしなる。

◎四段　よはひ久しき山人の。折る袖にほふ菊のつゆ。うちはらひうち拂ひ。千年の秋やおくるらむ。

◎五段　鴉の海づら見わたせば。たくひなみまにありあけの。月かげさえて白砂の。雪をかけたるせたのはし。

◎六段　萬代かけて相生の。松と竹とのふかみどり。かはらぬ色はもろともに。老せぬちぎりなるべし。

橋姫の曲

◎一段　水のうへのうたかた。露にやどるいなづま。あるかあきかの世の中を。宇治川のはしひめ。

◎二段　身のうき時は立ちよらむ。蔭とたのみし椎がもと。空しき里となりにける。契のほどぞかなしき。

◎三段　峯におふるさわらび。むかしの花のおもかげ。忘れがたみにつみをきて。ぬしなき宿におくらむ。

◎四段　さきの世のちぎりか。この世のうちのなさけか。空しき跡と宇治の里。絶えずこゝにやどり木。

◎五段　一方ならぬものおもひ。よるべさだめぬうき舟。あだなる名のみたちばなの。小島が崎にこかるゝ。

◎六段　小野の花の秋のころ。閨のつまの紅梅。それかとまがふはなぞの。むかしの人ぞこひしき。

二長の曲

◎一段　あしびきのいはほなてしこや。なほまなづるの羽ごろもを。千代に一たびうちつけて。なづともさらにつますまじ。

◎二段　長ぬの浦や春の日の。あしの若葉のやはらかに。ひなをもつれてあそぶなる。春のけしきぞほこらしき。

◎三段　鶴にのりし山びとの。こゝろにまかせゆきかよふ。よもぎかしまときこえしも。いつも老せぬところとや。

◎四段　このうちしらぬおもひでは。物かずならずいにしへ、だかき位をゆるされ。車にのりしためしあり。

◎五段　みたらし川にすむ龜は。神代をかけてしりぬらむ。はすの浮葉にあそぶこと。千とせの後ぞ身はかろき。

◎六段　河圖のうらもじ思ひでし。あとならひて今もなほ。ゆふけをとへば何ごとも。吉にさだまるめでたさよ。

友千鳥の曲

◎一段　滿干絶えせぬしほの山。さしでの磯の友千鳥。君が御代をばいく千代と。聲もゆたかになきかはす。

◎二段　日かげのどけきかすが野に。若菜つみつゝよろづ代を。いはふこゝろの道すぐに。神のめぐみをいのらむ。

◎三段　・誰かはあかむときはなる。松のみどりも春はなほ。今ひとしほの色みえて。なかめもふかきこのごろ。

◎四段　うつしうゑてし庭もせに。生ひそふ竹の枝しげみ。しげくも見ゆる千代の影に。なるゝよはひやいつまで。

◎五段　むかふひろきわだづみの。濱のまさごをかぞへつゝ。世のありかずにとりなして。久しきほとをしらばや。

◎六段　ことぶきなれし鶴かめも。千とせの後はしらなくに。あかぬこゝろにまかせつゝ。かぎりもあらぬゆくすゑ。

若葉の曲

◎一段　ゆかりよしある初草の。若葉の上を見つるより。いとゝ變らぬ袖のつゆ。猶うきまさる旅寢かな。

◎二段　うつゝなやひとりね。夜半の枕に吹きまよふ。み山おろしに夢さめて。涙もよほす瀧のおと。

◎三段　いざさらば宮人に。行きて語らむさくら花。木の間のしげきことなるを。風より先に見せばや。

四段　かくれが深き奥山の。松のとぼそを稀に明けて。また見ぬ花のかほばせを。見るよりぬるゝころも手。

五段　たそがれ過ぐるをりから。ほのかに見えし花の色に。迷ふこゝろは朝がすみ。立ちわづらふぞものうき。

◎六段　いつしかにくみそめて。悔しと聞きし山の井の。淺きながらもさりとては。絶えぬ契りをたのまむ。

玉鬘の曲

◎一段　いかなるすぢとゆふがほの。露のゆかりの玉かづら。むかしをかけてこひわたる。えにしもいかで淺からぬ。

◎二段　初音ゆかしきうぐひすの。すだちしまへのねをとへば。谷のふるすのめづらしく。春の日かげぞのどけき。

◎三段　さくら山吹とり〳〵に。花のまがきに飛びちがふ。胡蝶のまひはかなくも。あかずくれゆくけしきかな。

◎四段　こゑはせで身をのみこがすほたるこそ。淸きひとへのなさけにて。それかとばかりわすられぬ面影ぞゆかしき。

◎五段　かゝりひにたちそふ。戀のけふりの世とともに。絶えぬほのほとなりぬるを。行方もしらぬおもひかな。

六玉川の曲

◎一段　いはでおもふこゝろの色を。八重にもしうつしそむてふれなさに。春のつきげの駒とめていさ水かはむ山吹。

◎二段　おのが秋とやさほしかの。しがらむ花のすり衣。うつろふ波のむらさきに。亂れそめにしし露。

◎三段　かはとにつたふ松かぜの。音たに秋はさびしきに。衣うつぎのかきもあれて。きぬたもいとゞいそぐなる。

◎四段　きのふの袖もほしやらで。またきぬれそふ秋露に、涙もひかりをうちよせて。さらすやしづが手づくり。

◎五段　汐風こして夜もすがら。つきもみかける川波に。くだけてものをおもひねの。夢をさそひて鳴く千鳥。

◎六段　とかへる鷹の山ふかみ。鹿はあらしのこがらしに。流るゝ水のなのみして。氷もむすぶばかりなり。

空蟬の曲

◎一段　うつせみのあるかと見れど。おもかげの影もあやな。香をとめしさよごろも。もぬけし人ぞこひしき。

◎二段　尋ねてもなか〳〵に。あはでの森のあはてのみ。つれなきものは心のちにて。ひとり胸をやこがすらむ。

◎三段　よる〳〵にもわかたもと。ぬれつゝまさるこひごろも。人こそしらねわすられぬ。身のほといかでわびまじ。

◎四段　戀しゆかしとつれなくも。かひなきよにもすみよしの。松はわが身のおもひにて。あはでやとしを經ぬらむ。

◎五段　思ひかさねて年月を。ふればむかしのなつかしく。おもひいひたることよひしも。なみだに雨やそはるらむ。

◎六段　とにかくにとにかくに。まことのあらばあらいその。波のあなたにへだつとも。よるべのなどかなからむ。

浮舟の曲

◎一段　おもふことといはてや遂にやましろの。宇治のわたりのうきせにも波は。はてぬ行方こそなか〳〵なりしうらみかな。

◎二段　うきよをわたるしばふねの。みなれ〳〵てさす掉の。しづくを見ればいつとなく。物思ふ袖のかくばかり。

◎三段　身を分ることかたしや玉くしげ。ふみたちかくるわりなさに。おもひみだれてうちかへす。心ひとつのくるしさよ。

◎四段　小野のすまひのおのづから。きこえやありとつゝましく。峯のあらしやさほしかの。聲にもたてずなりにけり。

◎五段　いにしへのふたふたならで。なにとなく心ゆかしの手ならひは。徒然なる日ぐらし。しのび〳〵のなみだなり。

◎六段　田のもの秋になりぬとや。稻葉にまじるをとめ子が。聲はをかしうちそへて。うたへばさらに雁ぞなく。

薄衣の曲

◎一段　數ならぬ身にはただ。おもひもなくてあれかし。人なみ〳〵の薄ごろも。袖のなみだぞかなしき。

◎二段　あこがれておもひねの。枕にかはすおもかげ。それかとてかたらむと。思へは夢はさめけり。

◎三段　しらゆきのみゆきの。つもる年はふるとも。あくまじやもろともに。ねみだれがみのかほばせ。

◎四段　ひく人はそれそれ。あまたあれどもつま琴の。もとのこゝろかはらば。ことぢにおちよあきかぜ。

◎五段　かしは木の衛門の。まりをとんとけたれば。まりは枝にとまりければ。うめはらりほろりと。

◎六段　さりとてはつれなや。ひかふる君かたもとの。あやにくになびかぬは。てがひの虎のひきづな。

薄雪の曲

◎一段　うらめしやかがみどり。うすゆきのちぎりか。消えにし人のかたみとて。涙ばかりやのこるらむ。

◎二段　比翼連理のかたらひも。かはればかはる世のならひ。さりとてはうらむまじや。むかしはなさけありしを。

◎三段　若紫を手につみ。深きこゝろの色ます。長きちぎりと結びしも。くさのゆかりとしるべし。

◎四段　しのゝめのまがきに。露をふくむあさがほ。玉のかづらたをやかに。かゝるや花のおもかげ。

◎五段　世々の人のながめし。月はまことのかたみぞと。おもへば、おもへば。涙玉をつらぬく。

◎六段　よしの川花いかだ。棹さすひまもあらじな。いはなみたかき山かげ。四方にちらす花の香。

思川の曲

◎一段　あふせあたなるおもひがは。岩間によどむ水ぐきの。かきながすにも袖ぬれて。ほす日もいつとしらなみ。

◎二段　おもかげのつく〳〵と。忘れもやらでおもひねの。夢だに見えてあけぬれば。あはでも鳥の音ぞつらき。

◎三段　いつのまにかはかきたえて。隔つる中となりにけむ。見し玉づさのもじが關と。名を聞くだにもうらめし。

◎四段　つれなくもゆく人を。とゝめがたみの唐ごろも。たつよりいとゞわが袖は。露にぞしほるしほるゝ。

◎五段　戀わびてたゞひとり。伏屋の床によもすがら。落つる涙はおとなしの。瀧とやながれいづらむ。

◎六段　なか〳〵につらからじ。たゞ一すぢにつらからで。なさけのまじるいつはりと。思へば深きうらみかな。

雲上の曲

◎一段　雲のうへのながめは。ありしむかしにかはらねど。見し玉だれのうちぞたゞ。なつかしやゆかしき。

◎二段　おもしろやさみだれ。花たちばなのにほへり。ほとゝぎす音づれて。みぢか夜なれどねられぬ。

◎三段　なか〳〵にはじめより。なれすばものをおもはじ。わすれ草の名にあれど。しのぶは人のおもかげ。

◎四段　おもひあまりせきかねて。恨みぬる夜のなみだは。とこすきさじやひとりたど。まくらにこひぞしらるゝ。

◎五段　むさしのにゆきくれて。月をながめて草まくら。こひしき人を夢に見て。うたゝねの袖しぼる。

◎六段　軒を遶る點滴。琴の音にたとへて。七年の夜の雨。聞てしらぬ夢の夜。

雲居弄齋の曲

◎一段　月とやいろやれのふ山の端に。はなれ〳〵のうき雲。見ればあすのわかれもあのごとく。

◎二段　思ひそめたよこきむらさき。袖はちしほのわか涙。さゆゑいわがなみだ。

◎三段　わすれ草かなのふひともとほしや。うゑてやそたてゝ。見てわすりよ

さゆゑい見てわすりよ。

蕗の曲

◎一段　蕗といふも草の名。めうがといふも草の名。ふきじざいとくありて。めうがあらせたまへや。

◎二段　春の花のきむぎよく。くわふうらくにりうくわえむ。りうくわえむのうぐひす。おなじ曲をさへづる。

◎三段　月のまへのしらべは。よさむをつぐるあき風。くもゐの雁がねは。とぢにおつるこゑ〳〵。

◎四段　長生殿のうちには。春秋をとめり。不老川のまへには。日のかげおそし。

◎五段　弘徽殿のほそどのに。たゝずむはたれ〳〵。おぼろつきよの内侍の

かみ。ひかる源氏のたいしやう。

◎六段　たそやこの、やちに、さいたる門を。たゝくは、たゝくともよもあけじ。よひのやくそくなければ。

◎七段　七尺の屏風もをとらばなどか越えさらむ。羅綾のたもとも。引かばなどかきれざらむ。

心盡の曲

◎一段　こゝろづくしの秋風に須磨のうらはの波まくら。衣かたしきひとり寢に。夢もむすばぬよなよな。

◎二段　ふるさとをはる〳〵と。隔てゝこゝにすみだ川。みやこどりにことゝはむ。君はありやなしやと。

◎三段　夏の夜のあかつき。夢をさますほとゝぎす。しろたへに見ゆるは。月

にさらす卯の花。

◎四段　きりにたゝずむさくるま。やつしてたつるをぐるま。人めしのぶのちぎりこそ。ふけてねやのかよひぢ。

◎五段　あかす川の水上を。硯の水に堰入れて。かくことの葉はつきまじや。今日もくらさむ命かな。

◎六段　契りしよひのたそがれ。しるべふかきそちだき。とめゐるかたの萩の戸を。ひらくや袖のうつり香。

天下太平の曲

◎一段　天下たいへい長久に。をさまる御代の松かぜ。ひなづるは千年ふる。谷のながれに龜あそぶ。

◎二段　人しれぬちぎりは。あさからぬものおもひ。つゝむとすれどむらさき

の。いろにいづるぞはかなき。

◎三段　はかなくもくまなき。月をいかでうらみし。とにかくにわが袖に。絶えぬ涙のゆふぐれ。

◎四段　花の宴のゆふぐれ。おぼろ月夜にひくそで。さだかならぬちぎりこそ。こゝろあさく見えけれ。

◎五段　すみよしの宮ところ。かきならす琴の音。神のめぐみにあひそめて。すぎしむかしをかたらむ。

◎六段　秋の山のにしきは。立田ひめや織りけむ。しぐれふるたびごとに。いろのますぞあやしき。

明石の曲

◎一段　ところから名にしあふ。あかしの浦の秋のころ。月さえわたりよる波

に。うつらふ影のおもしろや。

◎二段　このごろはいとゞしく。みやこのかたのこひしきに。かゝるこゝろの人ごゝろ。うきをなぐさむ今宵かな。

◎三段　いつとなくなかき夜を。かたりあかしのうらなくも。いかでいは根の松の葉の。ちぎりはすゑもかはらじ。

◎四段　幾夜あかしの浦の波。よせてはかへりうきしづみ。あはれをおもふおりからに。あはれをそへて鳴く千鳥。

◎五段　庭の落葉かむらさめか。かきならす琴の音か。よそにしられぬわが袖に。あまりてもるゝ涙かな。

◎六段　四智圓明のあかし潟。まよひの雲もうちはれて八重さきいづるこゝのへの。みやこにかへるうれしさよ。

三調の曲

◎一段　春の夜のまの風に吹き。ひらく露井の桃の花。央ならざる宮のまへ。月のかつらの影たかし。

◎二段　雲居の空に君めづる。姿やさしき舞姫の。夜や寒きとてめぐみそふ。花のにしきの袂かな。

◎三段　しづけき雲の窓のうち。あやなく花の薫りきて。うらみは長き春の夜に。巻もえやらぬ玉すだれ。

◎四段　あゝ琴をいだきつゝ。月をむかへばおぼろなる。影さへやがてこがくれて。ひとりつれなき夜半の床。

◎五段　池の芙蓉もおよびなき。人のたもとに吹きわたる。風のかほりはなかゝに。花よりもなほかうばしき。

◎六段　君がなさけの忘られて。すてぬ扇の秋もふけ。かたぶく月の夜もすがらみゆきを待つぞはかなき。

桐壷の曲

◎一段　きりつぼの更衣の。比翼連理のちぎりも。さためなき夜のならひとて。夢のあひだぞかなしき。

◎二段　みぢか夜の夢さめて。おもかげは夏むしの。身よりあまるおもひをば。いかで人にかたらむ。

◎三段　秋の夜はふけゆき。月はにしにかたぶく。松かぜや波のおと。鹿のこゑぞさびしき。

◎四段　道しるべせし小君の。なかだちにひかれて。ゆくへまよふか空蟬の。衣のかほりぞゆかしき。

◎五段　たそやこよひさ夜ふけて。柴のとぼそをたゝくは。尾上おろしの音づれか。水雞のつぐるこゑ〳〵か。

◎六段　あをやぎをかたいとに。よりてなけやうぐひす。うくひすのぬふてふ笠は。梅が枝のはながさ。

宮鶯の曲

◎一段　華清の春の朝がすみ。柳さくらの色ふかく。錦のたもとかをりきて。ゆき待つぞうるはしき。

◎二段　宮のうぐひす花に鳴き。軒の燕はあめをよぶ。うらやましきはおのが身を。心のまゝにまかすらむ。

◎三段　揚家をいでしそのいろに。君もこゝろをまどはされ。ひとりの外は目につかで。遠ざくるこそうらみなれ。

◎四段　えらばれしいでし二八の春。うつされ來ては六十の秋。空しき床に老いばてゝ。ねをのみなくぞあはれなる。

◎五段　ふようはなおとろへて。露のたまひかりなし。今は見えじな見えもせば。うとき人には笑はれむ。

◎六段　壁にそむけるともし火の。またたき殘すよもすがら。窓うつ雨の音聞けば。いとゞさへねられぬ。

◎七段　譬へていはゞはなとり。文につくり詩にうたふ。今樣すがたとり〳〵の。中にわびしきたゞひとり。

四季の曲

◎一段　はなの春たつあしたには。日かげ曇らでにほやかに。人のこゝろもおのづから。のびやかなるぞよもやま。

◎二段　春は梅にうぐひす。つゝじや藤に山ぶき。櫻かざすみや人。花にこゝろうつせり。

◎三段　夏は卯の花たちばな。あやめはちすなでしこ。風ふけばすゞしくて。水にこゝろうつせり。

◎四段　秋はもみぢ鹿のね。千艸の花に松むし。かりなきて夕ぐれの。月にこゝろうつせり。

◎五段　冬はしぐれはつしも。あられみぞれこがらし。さえし夜のあけぼの。雪にこゝろうつせり。

四季友の曲

◎一段　春たちくればわが宿に。まづさきそむる梅の花。君が千と世のかざしぞと。見るものどけき色なれや。

◎二段　瀧のしら玉千代のかず。岩根におつる五月雨の。雲間すぎゆくほとゝぎす。たゞひと聲のおとづれ。

◎三段　月をのみなかめても。かくばかりをしまるゝ。秋の夜ごとをいたづらに。すぐす人こそつらけれ。

◎四段　神無月しぐれても。色かへぬ松が枝の。緑うづめるしら雪は。とかへりの花ならむ。

四季富士の曲

◎一段　田子のうらなみうちいでゝ。見れば雲居にたかき名の。山のすがたによつのとき。わくるぞわきていひしらぬ。

◎二段　春はかすみのあさもよい。きのふの雪をそれながら。うへなき花の色ぞとて、見るや山はふじのね。

◎三段　雪にたとへて三重がさね。扇をとれる手のうち。夏は消えてゆうぐれの。なかめをうつすふじのね。

◎四段　秋はさらなりつきゆき。見ぬ人にしもかたりなば。長きなかれやなかく〳〵に。いはでやみなばふじのね。

◎五段　みふゆになればみやこ人。まつらむ雪を鳥がなく。あづまにすめばあさなげに。見てこそあらめふじのね。

◎六段　時しらぬときしらぬ。山はふじのねいつとてか。かのこまだらに雪のふるらむ。かのこまだらに雪のふるらむ。

四季戀の曲

◎一段　物のあはれはこれよりぞ。しらざらましやしらざらめ。時につけつゝうつるこゝろ。いづれか思ひの種ならむ。

◎二段　いとよりかけしみどりこそ。ねみだれ髪のおもかげ。なかめせしまに色も音も。うつろひやすき人ごゝろ。

◎三段　うすきなさけををりはへて。いとはかなくとなきらし。つゝむにあまる胸の火に。夜すがら身をやこがすらむ。

◎四段　としごとにあふとても。ねる夜すくなきちぎりかな。歎けとてやはてりそふる。かげそちゝのかなしき。

◎五段　をざゝが上にたばしるは。わかれの袖のしらたま。思ひふるやの軒につもる。うらみとけてしのびね。

新雲居齋鳥の曲

◎一段　月もろともにほとゝぎす。鳴きているさの山の端みれば。はやみじかよもあけわたる。

◎二段　またのあふせもいざしの露の。あまりておける袖のうへ。げにもそでのうへ。

◎三段　あはれはかなさうき世の中に。共に絶えせぬ契をぞ待つ。げにも契をぞまつ。

飛燕の曲

◎一段　久かたの雲のそで。ふりしむかししのばし。花にのこる露よりも。消えぬ身ぞはかなき。

◎二段　世をてらすしらたまの。數のひかりならずば。天つ少女のかざしして。月にあそぶなるらむ。

◎三段　くれなゐの花のうへ。露の色も常ならぬ。夢はのこるよこぐも。ふるは袖の涙かな。

◎四段　なつかしやいにしへを。しのぶに匂ふわがそでぬれて。ほすこすのとに。あはれなれしつばくらめ。

◎五段　たぐひなき花の色に。こゝろうつすこの君。うつゝなきおもひこそ。いとゞなほもふかみ草。

◎六段　散りやすきならひとは。よそにのみきゝし身も。うつろふはわかとが。恨むまじや春かせ。

雪月花の曲

◎一段　さくら卯の花しら菊に。まがふは雪の色ながら。まかはぬ雪のしらかさね。とむる袖の梅ふ香。

◎二段　小野の御室のつれ〳〵を。夢かとおもふ雪の夜の。深きこゝろにふけわけて。とひし君こそわすれぬ。

◎三段　ひさかたの中にゝふる。かつらのほほふ花ならじ。一えたたれもをりからし。世々につたへむ月の名。

◎四段　はつきかなばの月すみて。空飛ぶかりの聲おつる。白妙ころもうつゝなり。夢のちぎりのあはれさよ。

◎五段　花はみよし野をはつせや。あらしの山もおしなべて。雲となかめし人丸のむかしの名こそうれしけれ。

◎六段　世の中はものかはり。星うつれども春の花。柳のいとの絶えやらで。くるとし〳〵のたのもしさ。

須磨の曲

◎一段　須磨といふも浦の名。明石といふも浦の名。さらしなの月ともに。ながめていざやあがさむ。

◎二段　春によせしこゝろも。いつしか秋にうつらふ。くろあかぎのませの中に。よしある花のいろ〳〵。

◎三段　きり〳〵す夜すがら。何をうらみすだくぞ。われもおもひに堪かねて。いとゝこゝろのみたるゝに。

◎四段　なか〳〵に人をは。うらむまじやうらみじ。とにかくに數ならぬ。うきみのほとぞかなしき。

◎五段　三五夜中の新月。隈なきぞおもしろや。千さとの外の人までも。さぞやながめあかさむ。

◎六段　しんかうに月さえて。車のおとの聞ゆるは。五條あたりのあばらやの。夕がほをしるべに。

末松の曲

◎一段　末の松山波こすとも。かはらぬ色は松が枝に。君が千とせのかぎりなき。みきはの池に龜あそぶ。

◎二段　身にしみわたる秋のころ。月もくまなきねやの戸に。かへるさ告ぐるくだかけの。またきに鳴くぞうらめしき。

◎三段　なか〳〵に今はたゞ。おもひ絶えなんとばかりを。人づてならでいふよしも。あらでこがるゝ身ぞつらき。

◎四段　しのぶ山しのぶ山。あはれしのぶの道もかな。人のこゝろの奥までも。見てやゝみなむわがおもひ。

◎五段　さよちどり夜もすがら。鳴くはわれをとふやらむ。須磨のすまゐのもうきに。涙をそふるこゑ〳〵。

◎六段　ちきりきなかたみに袖を。しぼりつゝ末の松山。波こさじとはいかにいひけむ。あたになりしうらみかや。

軒の松風

愛氷生

雨にはしめらずとも、心ひきたゝねば、何事のおこれるにかと、胸を騒がすることあれば、糸は古びずとも、折からの爪ざはりに切れたるを、何事をしらするにかと、心おちゐぬ如きを、琴はすましたものあり。

我を買ひかぶらせたまふと琴やいはむ、其音色にて罪をつくらぬは琴なり、されどかなづる人をいかに見んかはとは、立入たる世話なり、音樂は人の心を樂ましむるが、第一の功能とも云ふべきに、悲しき曲をきゝてうれしかりしと喜ぶもをかし。

音樂は鳥の聲、虫の音にかへて賞翫し、心を洗ふものなれば、いやしくも人として、音樂をたしなむほどの風流はほしきものなり。

雨の日に三筋の糸はなまめかし、さらぬ限りはつり合はず、雨一しきり、琴の音其間を縫ひ、さては峰のあらしか、松吹く風か、簷より落つる水のしらべか、ゆかしとは何時の頃より歌ひはじめけむ。

1619/40

斯る消息をこそ琴には聞かましけれ、さるに朝夕琴の音になづみて、この働きを知る人々の催しにて、成歡驛など云ひて當時の戰爭を歌ひたるを聞きたり、勇ましからざりしこそ、琴は其本分を守りたるなれ。

琴の事を歌ひては、どこまでも昔の人の耳は高し、小將の曲、長恨歌などそぐはしゝ、いくさにても源平の花やかなる一ふしの如きは差支なけれど、喇叭の音に進軍する今のいくさを、琴の糸に歌はせんとは、さてもいたはしや。

花の如き姫君、薙刀取りて戰場に向ふ圖凛々しき中に云はん方なきやさしさあれと、それは昔の事也。

琴を學ばむ人、これまで聞馴れたるあやしきものを美しきものにかへて、どこまでも、軒の松風庭のやり水、しづかに清き音を聞かするにつとめよ。

琴曲妙文集 終

明治三十八年十月十日印刷
明治三十八年十月十五日發行
定價金四拾錢

著作者 中川愛氷
東京市神田區錦町一丁目十番地
發行者 大月隆
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷者 青木弘
同所
印刷所 株式會社秀英舍工場
東京市神田區錦町一丁目十番地
文學同志會
(電話本局千〇九三番)
發兌元
大阪市江戸堀上通一丁目一一九番邸
文學同志會大阪支部
廣島市西横町
文學同志會中國支部

著作權所有

文學同志會出版圖書目錄

美妙	定價二十錢 郵稅四錢
人生の氣力	定價三十錢 郵稅六錢
人生の初旅	定價二十錢 郵稅四錢
人生の老旅	定價二十錢 郵稅四錢
人生の悔悟	定價二十錢 郵稅四錢
人生の片影	定價十錢 郵稅二錢
人生の目的	定價廿五錢 郵稅四錢
人生經濟學	定價二十錢 郵稅四錢
人生の情事	定價二十錢 郵稅四錢
吾人の生活	定價廿五錢 郵稅四錢
山高水長	定價二十錢 郵稅四錢
風月萬象	定價廿五錢 郵稅四錢
斷崖絕壁	定價三十錢 郵稅四錢
枕頭の山水	定價二十錢 郵稅四錢
悲哀の快觀	定價三十錢 郵稅四錢
萬情萬眉	定價十六錢 郵稅四錢

最近國家社會主義　定價六十錢　郵稅八錢
斬奸狀　定價廿五錢　郵稅四錢
精神と力量　定價三十錢　郵稅四錢
虛心談　定價廿五錢　郵稅六錢
活學談　定價二十錢　郵稅四錢
活精神　定價三十錢　郵稅六錢
活禪錄　定價五十錢　郵稅六錢
禪學斷片　定價廿五錢　郵稅四錢
聖僧道元　定價二十錢　郵稅四錢

日本佛教拾二傑傳論　定價三十錢　郵稅四錢
馬琴妙文集　定價二十錢　郵稅四錢
滑稽妙文集　定價三十錢　郵稅六錢
戲曲妙文集　定價三十錢　郵稅四錢
呑氣文集　定價廿五錢　郵稅六錢
高等艶麗文集　定價廿五錢　郵稅四錢
立身の事蹟　定價二十錢　郵稅四錢
研學の順序　定價二十錢　郵稅四錢
青年の將來　定價廿五錢　郵稅四錢

作文指南　定價廿五錢　郵稅六錢
山水記事論說文　定價三十錢　郵稅六錢
高等記事論說文　定價三十錢　郵稅四錢
偉人の膽力　定價廿五錢　郵稅四錢
偉人の生長時代　定價廿二錢　郵稅四錢
頓才の詩人　定價十錢　郵稅二錢
深窓の佳人　定價三十錢　郵稅六錢
婦人實務錄　定價二十錢　郵稅四錢
女子讀本　定價三十錢　郵稅六錢

活戀　定價三十錢　郵稅四錢
戀と死　定價二十錢　郵稅四錢
墳墓の地　定價廿五錢　郵稅八錢
失策の半生涯　定價三十錢　郵稅六錢
成功秘訣　到着　定價廿五錢　郵稅四錢
天然萬丈　定價二十錢　郵稅四錢
小哲學　定價廿五錢　郵稅四錢
珍本　鴨長明海道記　定價十五錢　郵稅二錢
理想の大臣　定價廿五錢　郵稅四錢

禪學の奥義　定價五十錢　郵稅八錢
哲學要領　定價五十錢　郵稅六錢
加賀の千代　定價二十錢　郵稅四錢
成效者の苦學　定價二十錢　郵稅四錢
軍隊の側面　定價二十錢　郵稅四錢
理想の政黨　定價三十錢　郵稅四錢
戀愛の精神　定價三十錢　郵稅六錢
人情の後見　定價三十錢　郵稅六錢
無能の天下　定價廿五錢　郵稅四錢

社會學講義　定價五十錢　郵稅六錢
社會學と哲學　定價六十錢　郵稅十錢
吾家の志法　定價廿五錢　郵稅四錢
人生の審美　定價廿五錢　郵稅四錢
文學の審美　定價廿五錢　郵稅四錢
自然界の審美　定價廿五錢　郵稅四錢
婦人の情力　定價三十錢　郵稅六錢
戀愛の文豪　定價三十錢　郵稅六錢
弱者の臨終　定價三十錢　郵稅四錢

英雄の片影　定價二十錢　郵稅四錢
心識活說　定價廿五錢　郵稅四錢
詩の神　定價二十錢　郵稅四錢
學生の苦心　定價三十錢　郵稅四錢
心學養性篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學道體篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學人間篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學道義篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學迷悟篇　定價廿錢　郵稅四錢

心學性理篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學明德篇　定價廿錢　郵稅四錢
心學經性篇　定價廿錢　郵稅四錢
俳流の女神　定價廿錢　郵稅四錢
箴言　定價三十錢　郵稅四錢
高等秀才文集　定價廿二錢　郵稅六錢
奇僧の片影　定價廿五錢　郵稅四錢
高等才媛文集　定價三十錢　郵稅六錢
風彩と審美學　定價三十錢　郵稅六錢

審美學要義　定價三十錢　郵稅六錢

高等美文斷片　定價廿錢　郵稅四錢

女子美文斷片　定價廿五錢　郵稅六錢

心の琴　定價二十錢　郵稅四錢

馬琴旅行文集　定價三十錢　郵稅六錢

秀才記事論說文　定價三十錢　郵稅六錢

中等作文組立法　定價廿五錢　郵稅四錢

美文組立法　定價廿五錢　郵稅四錢

近松妙文集　定價廿五錢　郵稅四錢

西鶴妙文集　發賣禁止

爲永妙文集　定價三十錢　郵稅六錢

芭蕉妙文集　定價廿五錢　郵稅六錢

立身冒險談　定價廿五錢　郵稅四錢

名流の家庭　定價廿五錢　郵稅四錢

社會學問答　定價三十錢　郵稅四錢

社會學と事業　定價七十錢　郵稅十錢

軍人と膽力　定價二十錢　郵稅四錢

軍歌集　定價十二錢　郵稅四錢

處世の歌　定價三錢五厘　郵稅二錢

征露詩集　定價十五錢　郵稅四錢

小學高等科字引一學年用　定價十錢　郵稅二錢

仝　二學年用　定價十錢　郵稅二錢

仝　三學年用　定價十錢　郵稅二錢

仝　四學年用　定價十五錢　郵稅四錢

中等國語讀本字引一學年用　定價廿錢　郵稅四錢

仝　二學年用　定價廿錢　郵稅四錢

仝　三學年用　定價十五錢　郵稅四錢

仝　四學年用　定價三十錢　郵稅六錢

仝　五學年用　定價三十錢　郵稅六錢

高等美文資料　定價廿五錢　郵稅六錢

歌花集　定價二十錢　郵稅四錢

玉琴集　定價二十錢　郵稅四錢

すみれ集　定價廿五錢　郵稅四錢

百字文集　定價廿五錢　郵稅四錢

忍ぶ草集　定價二十錢　郵稅四錢

人生と山水　定價二十錢　郵稅四錢

トエ5レ-47

テニソンの詩　定價六十錢　郵稅八錢

琵琶歌妙文集　定價廿五錢　郵稅四錢

謠曲妙文集　定價廿五錢　郵稅四錢

婦人の美觀　定價廿五錢　郵稅四錢

婦人と家庭　定價廿五錢　郵稅四錢

婦人の使命　定價廿五錢　郵稅四錢

婦人と文學　定價廿五錢　郵稅四錢

英雄僧日蓮　定價三十錢　郵稅四錢

新婚旅行　定價五十錢　郵稅六錢

不如歸集　定價二十錢　郵稅四錢

靜思斷片　定價廿五錢　郵稅四錢

殘雪集　定價十二錢　郵稅二錢

繪端書使用法　定價二十錢　郵稅二錢

百字文の栞　定價三十錢　郵稅四錢

漬物　定價十五錢　郵稅二錢

淑女妙文集　定價三十錢　郵稅四錢

東京女子遊學案內　定價三十錢　郵稅四錢

琴曲妙文集　定價三十錢　郵稅四錢

14

074459-000-1

98-195

琴曲妙文集

中川　愛氷／編

M38

CEI-1728